

呂
1368
卷 15



環海異聞卷之十四

長崎著岸より上陸以來と記

九月六日 長崎の町に上陸して

おつた

長崎の港にはおもしろい事あり

知事も精進を祈るの事あり

船もよく行かぬと記す

環海異聞卷之十四

長崎著岸より上陸以來之紀

九月六日 辰九ツ時長崎伊王崎に船と

船と

長崎の港にはおをりしり事船中り役人等
知り多し船子あれも船中の子左海の浅深の
程と考へ船中りし事と早し船中り内院子中



船の入りしり長崎まで行かんとする御役人
商人中黒の少旗と建て書船ふりて行かんとす
以誠をり船中ありて長崎役ふり見分の
船東ありて船をて漂流人を出し子細を
中ぎせよと使節命せり我々長崎の役
海の日如地といひ又長崎をりといひ
何をあふしりて思ひ通せしむ
より役船東をりて我邦の船東を

之をく己儀の形しり内政等々を分と見せし
船の造り並ふ月ふ形しりて日本人あり
娘も長崎をりて交り滞りて使節の
命をりてすしりて船東ありて
船の入りしり長崎の役ふり見分の
船東ありて船をて漂流人を出し子細を
中ぎせよと使節命せり我々長崎の役
海の日如地といひ又長崎をりといひ
何をあふしりて思ひ通せしむ
より役船東をりて我邦の船東を

彼船一宗あり福あり清玉許送状並不浦智渡の
山切手等と出〜山役人トノ名をきぬ、史書に
山島ありあるふん定りて始て言葉と出〜漂
流以來以後本船浮来且我〜を復送し
来り改算よりあり〜小中よりぬ、山波屋の上は
方の指圖に依りて遊と下き〜向ぬ伊之碇と
す、のち山とあり〜と月に入り遊と下き〜
とあり

追々、は玉風程の甚れあり〜山島
影々、神崎〜山島入り遊と下き〜とあり

は常カロシヤ人ト別不山島よりもなく遊小船と
引返〜お上り時以て小舟、山島使主人
伊豆方面行方
是、大津門
山島活る事トヤ〜
何事、他人主人、一人、加比丹ドーフ
いふ人ト〜
大小通相、山島
同日七時迄出船止る
伊玉寄〜至るト〜 番船あり
系〜れ本船〜福あり、使常我〜、山島
本玉中、作り、共〜ら、日本結立の彼と見

暫くお座し〜 指図ふつき 是と 是用〜 所出
ゆつて 階々の次第四級人 才妻御ふ 此乳間
あり 此帝使帝レサノツトハ 椅子小 御座し〜
阿茶能の加比丹ハ 同百ハ入きて 我れ何
間者あるや〜 也 招加比丹使言乃 服付を
見て甚恐れおけ〜 幸あり 大通相 石橋助左衛
と〜 人彼級人 ラニゾフト〜 考〜 對話法
分れおる〜 也 使帝阿茶能 加比丹と 乙彼

位階も 至り 早きりのをり 我と 同座す〜 事
か〜 用中 指〜 上〜 引退を 樽〜 上を 無
傍の役人ハ 指図せ〜 振子あり 加比丹と
退き 樽〜 上を 我れ〜 在 此 尋〜 通
爲〜 此 示ハ 退出せ〜 在 此 傍の 子 不
せり 此帝 相前して 先年 後〜 並れ〜 此
禮文 何れ〜 此 尋あり 是を 指出す
大物 小築 借ふ〜 錦祿の 不復と 五恭〜

持け出さる船あり 川合もろく 國王が乃
出芳寫とも 指出せし 物上物乃 内何し
不出せし 波り

玉王の書管 結構あり 上層のまはを
うき箱入る 舟中よりしと見し
あれ九月の文云 管のり 波及
は年兵 葉乃 幅硝管 暫く 川取上
波りり 是は 地を 川定法をり

いふの 魚干 波及 書き 物あり
見し 管初より 是 情し 指出せし 也
古河 紀し あり 波及 川取 丹も 共し
船し あり

附記
長徳く 魚干 西無 船忌 岸の
管初より 船使 川取 管寫
九月六日

一天草 是 川取 書あり 船船を 以年 之方 あり
書あり 白帆 あり 川取 進む 野母

小瀬戸(小)江進(五)寸(大)寸(以)寸(存)号
第(一)上(江)作(舟)同(人)に(未)知(以)寸(舟)寸
二(舟)船(後)来(寸)公(當)各(四)寸(先)来(寸)寸
順(凡)記(寸)寸(通)寸(左)國(船) 寸(口)寸(ア) 寸(寸)寸(寸)
可(寸)寸(舟)寸(腹)寸(出)寸(出)寸(以)後(寸)寸(舟)寸(舟)
小(舟)人(寸)寸(寸)寸(寸)寸(未)寸(小)瀬(戸)寸(分) 八(里)程(寸)
江(進)五(寸)寸(舟)寸(加)寸(丹)寸(舟)寸(以)寸(寸)寸(江)
舟(作)後(申)寸(刻)寸(以)寸(也) 寸(江)寸(舟)寸(城)寸(圖)寸(下)

刻(江)王(橋)寸(沖)五(丁)程(沖)一(礎)寸(入)寸(亥)寸(刻)寸(以)
檢(使)此(方)出(級)寸(舟)寸(以)寸(也) 寸(舟)寸(船)寸(船)寸(船)寸(船)
以(入)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)
級(掛)寸(寸)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)

船(形)寸(船)寸(入)寸(口)寸(是)寸(種)寸(在)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)
級(寸)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)

一(寸)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)

一(寸)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)寸(舟)

一何故に海東に下りし事

ヲ口にヤ玉王の江府へ三通の書爰に
献首相禮の物交使序と云ふ海東使に

一先年振夷地の海に和信牌の海に書
たは序持海に也

大持海の外信牌、出に拾使に入也也

一才口に中國の何故出船校也且何處に立
たる事也細中上は振夷船也云々

は年先、書載に之事

一江府表並出書紙下は及出の書翰拾使に

下海に也

は江府表、指に書同下は上出、指上、下、出、紙、紙、
指、出、書、也、也、不、持、系、信、交、何、分、他、之、書、翰、指、上、也

一信牌拾使に海に事

是亦以役下也、也、不、持、系、信、交、也、也

一玉法の子取武器玉葉今晚年也

は玉法、子の取、武器、玉、葉、今、晚、年、也、何、分、種、校、
以、り、却、り、交、は、は、玉、法、紙、下、上、也

牛養進言以沙汰一可及也

古以礼未備上源流人四人之老有等出

以礼之次第在礼

一 牛方在何至之老也

仙童之老在何至

一 仙童之何至之老也

以老在通

牛方村 津美 二十七年

室ノ濱 儀平 四拾三年

日 老平 四拾三年

字ノ氏 古十郎 三十四年

一 何年何月何日仙童出船致也

一 寄政丑丑年十一月七日出船也

一 抄り也丑三何政致漂也

一 丑十月廿七日 難船中事以丑宣寅年五月

十日と是おる也丑に漂流仕也

右七廿七りの日附海老等よりあふ凌り
夥らしく傳寫の誤りあり

一何と積文仙臺出船紋也

仙臺の江戸表の口城系積文出船仕合

一此方たかおろしや人に於て此岸、宗徳系系

おろしや玉王の法皇出此方た日本一城玉紋

高野の山君の法皇傳玉仕合方中の延

長く此岸日本一城玉の法皇系系

系系

一船の名石紋也い何と云

名は石紋丸石紋八百石二十六反帆ていせ

一系組何人てい何と云

船倉持合人系組三人おろしや玉て病死

仕残り九人おろしや玉仕残り

一九人の何れ仕残りの也

五て大玉の儀いせりおろしや出船の九

人て其仕合中た九人の内五人極老

山撫使の書也

但名八九巻之發給

此の向家硝子障子窓生巾子板等々大鏡と

馬子等々前子巾子四方の飯盒等々敷き等々

上等度以落葉等種紗は上等子三尺四方の障子

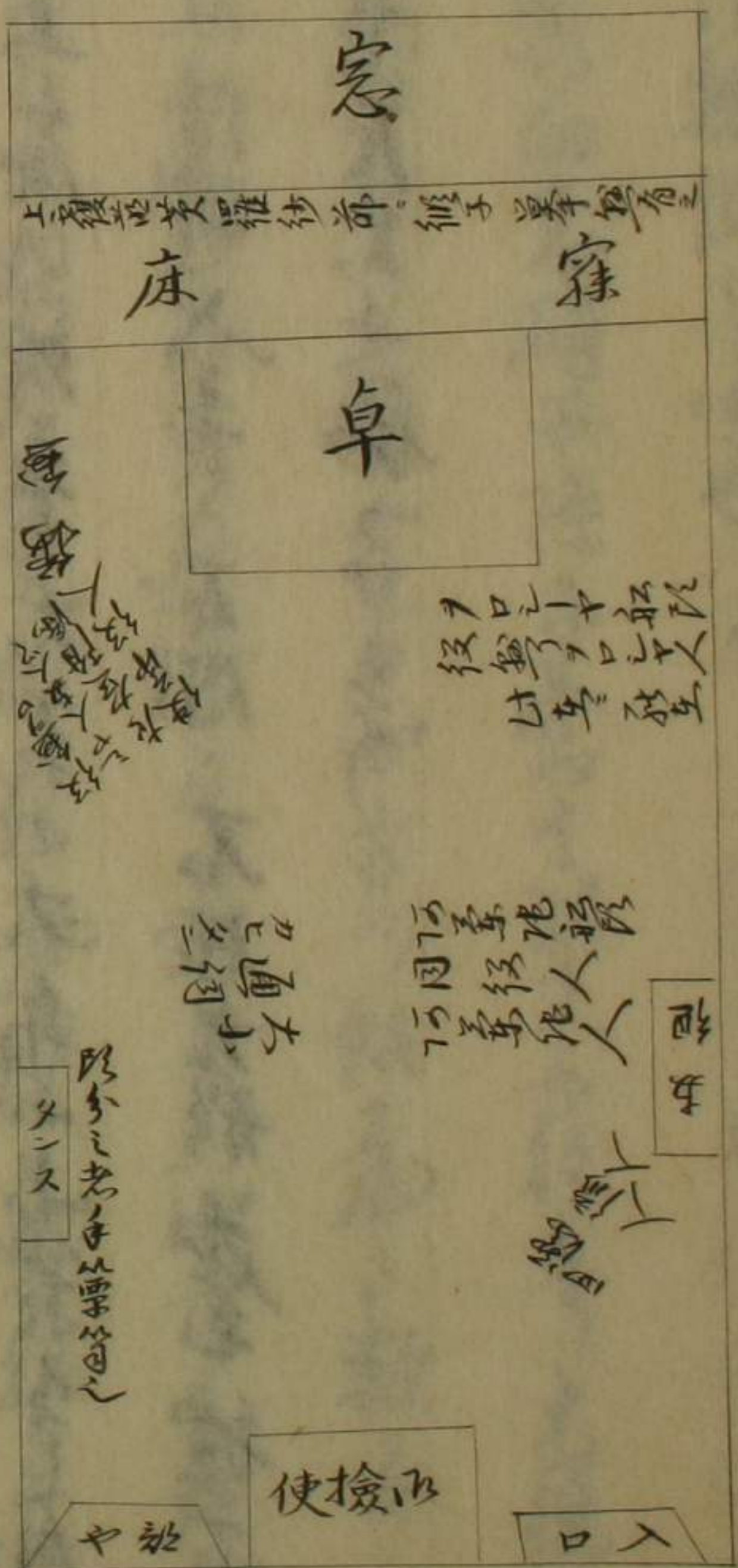
等々此の大鏡等々内江府の持の書翰之通

和文ヲロニア漏別後一通も此等行不指上

書翰之通江府表の指上書翰等々寫入等々

江府の持の書翰之通といふ以下系文傳等の誤りあり
似不成語按て多し江府の持の玉王の書翰同意の事

之通了不徳持多し是等書翰之通之和文不徳メ一通之由オロニア
辞不個一之通之漏別後を以て書ルル一太同指の漏し也
持多しと是の以等行不指上内之入使等の指意
先以以等行不指上内之入使等の指意
書せし何の文を以て書ルル方
以合然其有るは指上と云用ひし也
以上を度ひ致し是太策と又外不少策等々内
子信牌入等々石月不形花毛纏等々
是等物等々指上け等々



是の長崎通河より流布せり此の書は
 尺半巾幅と傳せりて付の帳子と知るは好
 ありはふ抄紙す

同七日

板中引紙を本紙浦より取挿入る
 長崎に付長崎所法事務ありて前年之日
 斗の百通紙ありて番紙お付られし也
 付日後紙は漢内へ引入るなり 仮小屋紙未出
 来り
 正本紙浦に伝を立す暫くはふ上陸紙す
 ありけり而して番紙なるを何れすとも也
 付是の名一と定ふべし
 本紙浦の紙す
 本紙浦の紙す
 付是は信管箱より取りの紙す
 公儀の紙板木の子ふ紙せり物きりふに附す

長崎湊口圖

東

所番河

泊西

領前肥

肥前陣場

肥前陣場

至冬年

見遠

戸瀬小

此所葦張廻ス

此邊福田

大村より出張

島子

島子
陣場
高野

此邊河川
最初破入

島子

陣場肥

陣場肥

陣場

陣場肥

陣場

所番河

陣場

陣場

陣場

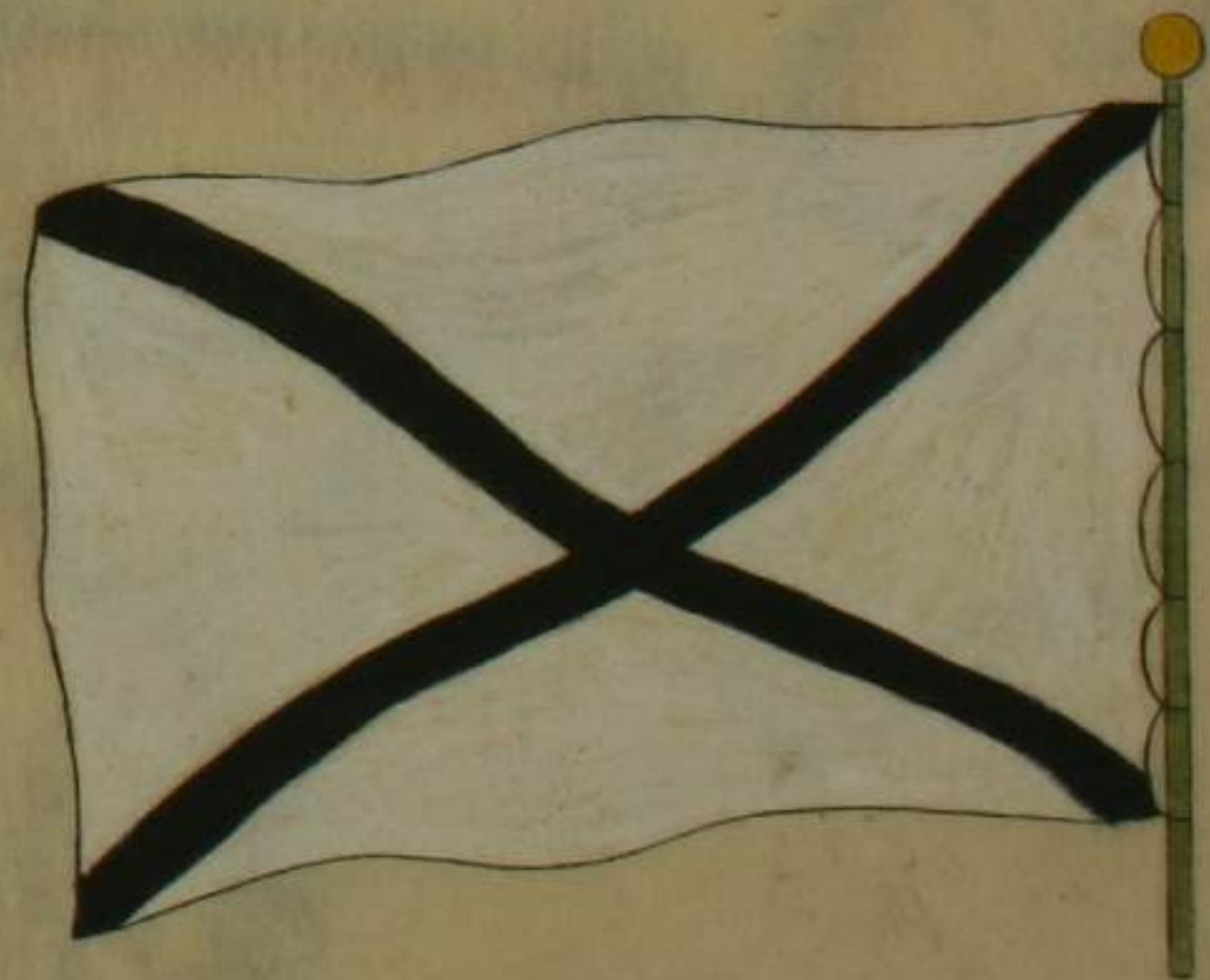
陣場

此所河川
最初破入

陣場



魯西亞國船印小旗圖



按西洋ニテ鷲形ヲ以テ徽號トナスモノ多シ其来由ヲ繹ヌルニ本朝 開化天皇ノ五十六年ニアタ
 リテ暹馬ノ大酋カリヌマウリスナル者其軍旗ニ鷲ヲ畫キシニ始リテ其後暹馬 厄勒祭亞ノ帝王
 皆双頭ノ鷲ヲ以テ其徽號トス此双頭ノ鷲右ニ球ヲ抱リ左ニ笏ヲ把ルモノハ其原ハ厄勒
 祭亞ノ帝國ノ徽號ナリシカルニ魯西亞ノ主ヨハンニス バシリテスナル者厄勒祭亞ノ女ソヒア
 娶テ厄勒祭亞ノ帝号ヲ受シヨリ其徽號ヲ傳ヘタルナリ球ハ和蘭語ニテ「レイキス」スタフ又「スセフテル」ト云其形
 其形 品 如此ナリ鷲ノ胸ニアルモノハ魯西亞本國ノ徽號ニテ 騎馬ノ人箱ヲ以テ誌ヲ刺ス形
 ナリコレヲ「シントセアルゲ」ノ服章トイフ

魯西亞船入津圖



長崎勝山町令見屋
 長崎出船

大村



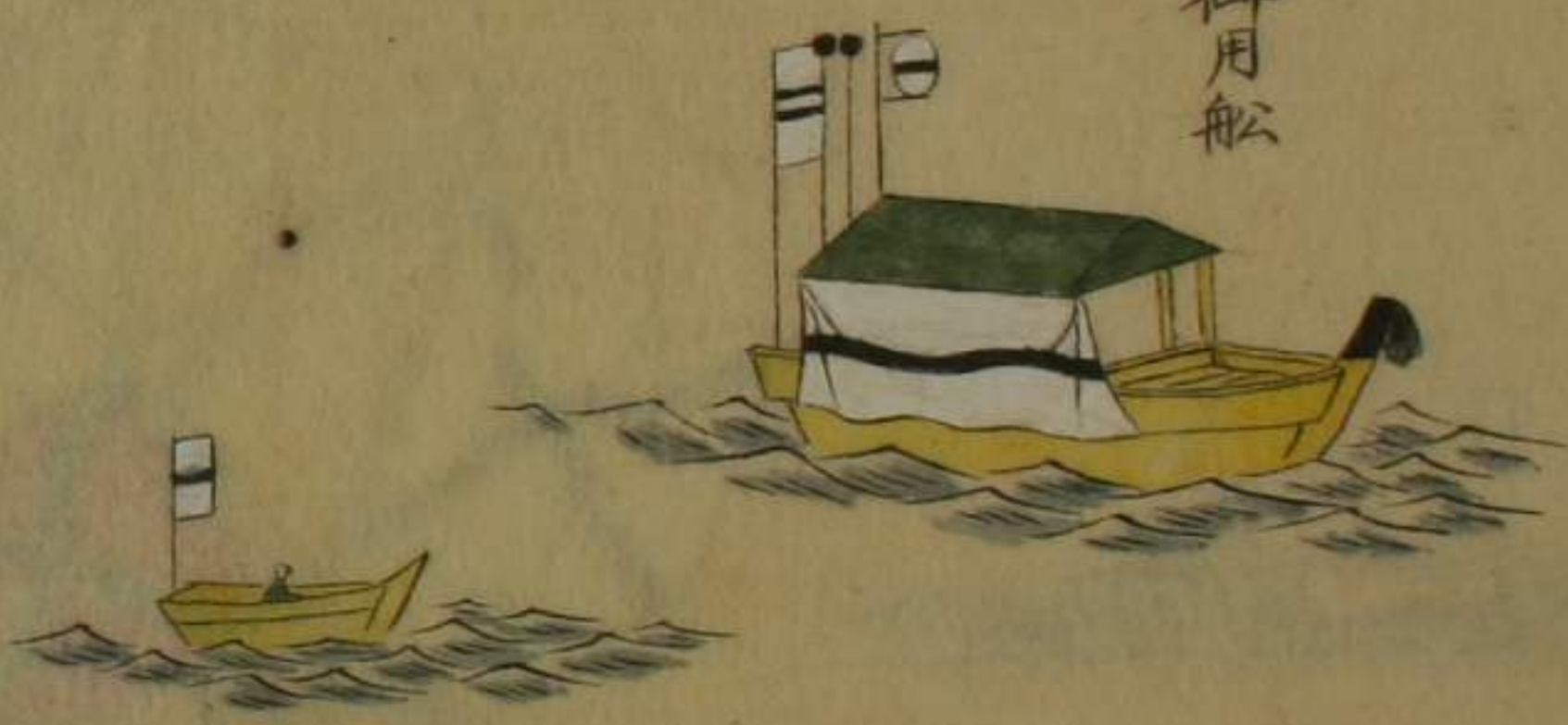
佐賀



大村



御月船



佐賀



追々上陸の事お預第一本船破壊の修理も修
 復等修々中上中申きて梅崎といふ所は復修出来
 十一月十七日 使員と船役舟の者都合計松人
 一説 上陸しそふ修修
 十人

飲食調理の事も申ふありは修修船

復修 佐賀の各船五九一乗修り上陸を修修

陸と長崎より
修修す

魯西亞人客館圖



右の梅の枝は建つ所の魯西亞客館の略繪圖
 たりと其の隣の港口の國の國より東界の國は
 一々其の略をいふせむなり本館入付の國
 番船等も皆大略なりと其の正圖は
 公考のいふごとく其の略をいふし其の正圖は
 國も亦をいふと其の略をいふし其の正圖は
 其の略をいふし其の略をいふし其の正圖は

塗アカのこれ合振ふなりあるをと綴せし

食料も日々山迄ありかやいふ何ふう〜は入

らぶ

彼人等何をもけりよりけり〜お欠かきり

甚或〜将油〜ふて煮味せり味留たは清

用の馴さるおや振ふ煮たせしめ

渾る中土地の景色と生寫させるとの難及出来

ありおの影と鏡〜移〜なりて寫す及らあり其

中日本婦人の姿と寫せ〜減ふ生容〜似せ

ありたれ是岸の以餘程隔〜高交メカよりを

見〜ありしおとけ蓋〜移〜て寫さしあり

梅お生籠り利奈ふり〜ドニルカーハルといふ

ものあり〜

魚子等の類取の上並〜鱈肉〜合して寫さ

せり或〜圖ふり或〜多振〜丸撃〜し〜腹因〜

別ふ物を納め眼と入し代〜生ふ生おの如く作り

成せりものあり、ヤマトリ野雉ノトリは誠なる初ハツメの勢イカリあり

籬シのふ入イりし物モノは其菜ナの類ルイを一つイツと圖ツとより支シく
の名ナを安ヤス自ヨリと名ナを唱ナゲへ呼ヨびて凡ニ其國クニ侍シひ能スす
國クニありとも凡ニ其國クニ侍シひ能スすとも其名ナをと名ナをむつる
一イツ種シュも漏ルすも其名ナをラランンツツとトりし醫イ師シ畫エも
出デ来キ細コ子シも極キョクりし巧コウを名ナをきし言コトを其名ナも其國クニの
辯ベン子シ通ツりし形カタを振フりし人ヒトの通ツりし多タく

事毎コトノトコロせし旅ツツなり

太タ十シウ平ヘイの牛ウシ乃ナラバ陰イン幸コウ備ビ屈クツの性セイあり中ナカ和ワ上ウヘ陸リク也ナリ
其名ナも何ナニの山ヤマ下カ知チも其名ナも我ワの山ヤマ文ブン之ノも
如何イカニなる事コトなりと思オモひ其名ナも澤タクせし一日イツニチ不フ圖ツ氣キ
初ハツメり大オホあり使シふ又マタ物モノ方カタと名ナをいひしは中ナカ呪ノ
内ウチを名ナをきし其名ナも其名ナも血ケツ駭カイ友トモ出デ虎コ不フ能ス命メ
不フ定テイ子シの其名ナも籬シ月ツキ彼カ人ヒトの其名ナも大オホ子シ驪リ竈ノの其名ナ
連レン山サン傳デンの山ヤマ捨シテ使シふ其名ナも其名ナも其名ナも其名ナも其名ナも其名ナも

お遠き事いれ争もお分り申及人外神志人吉雄

お無らるは書 あり太の醫師中よりとる道療治

あり吉も切して飲食之後にも出せず殊の外極

まり殊り之人の老臣痲着痛し未だ本性を

有申申も不意候の番にかゝり候太の志

より進言は申も愈々多し飲食之を通し

絶食三十日たり也候候も甚し高熱ありし

幸齋仁うまの瀝菜ウカイネリとありしあり候應りて

より、自中子通しよりあり候は手候は、彼玉の醫

師も我れりし振子也又候候は食りすみと食

菜とつましと物り候しより少く候万ふぬす

くはお致せしあり太の周りあり又候候は一向好

中より振りありあり候候は角子無云あり候

物き振るをあり候今よりあり

扱は申毎の醫師又候候外子候候は人

一の万ふり候候の雛形と作候候は、時々候内より

外との様子みて形を寫せりし事申されを見よ日本の
かゝる少くも遠くを歩かざればあきらかにあき

長崎湊の干海も氣を付て見し振子也

船中より上陸後ふいふても誰を人定しくりと云

者か〜或は測量兼用或は書記或は畫圖或は廻

り務めたりと云〜と船中も閑居せり

子年 文化元年 二月廿日 廿九日 江戸表より月舟

遠山金四郎及 長崎一泊後七日程を経て同二月初七

使節と立山山役おの呼出也

は長崎のちふふ侍の儀も多〜と云ふ海

ありせ〜と云ふ

山役おの使節等ありマヨルといふ官人数人 おれ長崎

外ニカペタン 船師名ニクルーセニラル ランゾフ 醫師也 長崎

を人外留所を人下連梅崎より波戸場へかけ

西屋敷前立山山役おの行き〜也

中野通新の所々、
 在るに幕を
 此後、
 申

使節レサノツト等之像

并冠帽諸國

ニコラ レサノツト 歳四十一

衣服花色天鷲絨但衣服ハ着替ノ毎度
 地性色共ニ種ニナレモ製作ハ同シナリ



此劔ハ筒ヨリ取り
放シニナル丈夫ナル
物ニテ一尺二三寸



歩^{アミカル}卒
サウタ

上案針役 歳三十四
ラートマノフ



劔ハソリアリ位階ニヨラズ
長短好次芽ト見ユ

同背面



早合朋乳玉薬入

足輕何れも對の衣袴也濃前黄羅紗なり其内大鼓と打ッ
 若くは色をとり
 如以紳の足輕亦人々侍節の影面の内小鼓を圍ふお侍居ハ
 一人一銃炮一人一籠とあり二時より代りたる

冠帽

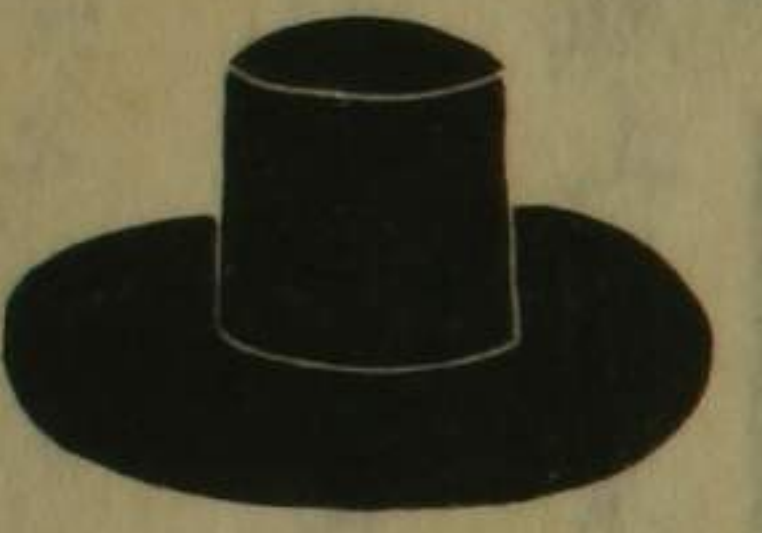
使節



船頭



同



役人



足輕



小役人



船頭



熊ノ毛ノ様ニテ
 長キ物ナリ

裏



才、ストロ

鎗



總蒔く至て年弱きものなり

使事我々白以時々の時不は友以考地を
以之扱以丁寧くくく外の外考考考考考
よりの形不付之振ふ長く以之扱の以厚い
招くはくたふふふふふふふふふふふ
献上物不為法形も以之免無く極既以
液はるすありし子、水々の逗留中通河井へ
活ふをゆしする有聊あり謝物より一交し
形以し中して使事不務相ありしと承及出

我より口役より以て文書の筆は任海に
使事しむるは何れも其度にお成すお禮交
りあるを知らず通りの次第にても口色
あつても偏少なるお苦勞もかたじけなく
しといふ我々の苦勞も是を年月の厚
恩をかり何れも其度にお成すお禮交
文納致せしむる同歩の口支の費用も
度とすといふ物の上せめて其度にお成す
裁をし

在り其書交して羅紗一束四人の者も指
出さるるを口役も中上よりお計りし
我々の口色法も出入固く辞退しせし
口檢使の書も其度にお成すお禮交の指
圖を以て苦勞文あり

は京江戸各の役の上 法上の指
使事何れも其度にお成すお禮交の
中納通る時其書の筆面書のものも

層々形不付海帆の上とては世ふては出
るふりある一と振おとて自は是を地と
踏ふ骨ケ出す地下をそよふ層々として層
志しりあり

出敵を我々携へて海を舟持て是は使舟
の舟へ出〜口捨使舟立合をて山改色正
たの面あり

一浦野切手出舟 斗投

一奥州仙臺より送杖 斗投

一糸衣丸紗材布 斗

一方針 斗

一本篠弓入 斗

一同給 斗

一同半拍 斗

一同才合拍 斗

一同襦才 斗

一 同帶

斗解

一 同級引

之長

一 同級牛

之長

一 同級袋

之長

一 同風長友

之長

一 積交單羽織

之長

一 同解裏

之長

一 岸寄解裏

之長

一 拔綿

之長

一 毛織小手當

之長

一 矢立

之長

一 紙入

之長

一 綾

之長

一 仔細書津袂

之長

四人之若如魯西亞國其物亦不之

一金錢

八十

一銀袂时斗

四ッ

一日本仕立袴袴入

四

一同羽織

四

一袴袴才

四

一日本袴

四

一同帯

四第

一草蒲圍

大十
七

一同并木袴袴

六

一羅紗袴才

四

一同合羽

四

一羅紗

七

大國王より追々著中

一金錢

六

一銀鈔

大十
六万九

一銅錢

八

一衣類及身入

四

一 羅紗長物

四

一 同縐才

三

一 同合羽

三

一 同紋引

七

一 緋草帶

二第

一 同風呂敷

三

一 本絨草麻縐絆

斗十九

一 同紋引

拾三

一 同風呂敷

八

一 麻蒲團

五

一 毛織袴

三

一 同草帶

壹第

一 同紋引

斗三

一 同合羽

四

一 女用草履草縐帽子

七

一 同紋引草履袋

斗拾四

一草袋

三

一同帽子

三

一同帶

五尺

一紙入

四

一手帶

斗

一毛皮

ソーボリ 貂皮

斗
七尺

一同袋

斗

一椰子水飲

斗

一物くまこ

三

一木杓

三

一深木杓

斗
反

一角木杓

斗

一椀

斗
七尺

一鉄布ろん

七

一鏡

斗
挺

一剃刀架

斗

一 錐

一本

一 錫罐

一本

一 同匙

一本

一 硝子籠

一本

一 同玉

四

一 硝子器の赤カノコ

一本

一 燭カビル爰

二本

一 針入

一本

一 鏡

一面

一 眼鏡

一本

一 横文字巾

一本

一 世界圖并船繪

一枚

一 麻地油繪 國王夫婦像

一枚

大に彼を逗留中縁海に金銀細紗を以て

潤みカビル知者より追々世を

漂るる白彼金紗をガランツケ 和室 千リランサ

とよ銭なり其形中子歟の形ありてたて子
銭と持ある人の像あり裏面横文あり

形圓く我歩刺より厚く目も輝く
銀鈔四万五千枚ふま替す ガランツケ者

可多能なり 可多能鈔ありて日本あり

交易ありていふ公を信りしりし者

オロミアの金鈔、ガラニツケより大ききなり

銀鈔四人あり六万九千六銅銭拾四枚

金鈔四人あり拾九枚持系なり

銀鈔、新吉拾六通あり皆持系なり南國

帝王よりエカテナ 考今
祖母 とて王の像を鈔に

者今の父王よりマモの文ありなりなり

オイトとよありとてなり銅鈔、年曆

何百何年とよ文を鈔にありよし

大持及具ありて追ふか以銀ありて五個の

段の長なり書換てあり補入を出敵なり

拾五山江銀あり山江銀はとてなり 先
なり

身一之幸利不思福也七知形成物一
得朝せし中乃嬉しま何きく十三ヶ年の事
目守秘友今子娘出見し中は秘以印もあま
結し以事

環海異聞卷之十四

26

